

分布: 全国

### イヌガラシ (アブラナ科)

学名: *Rorippa indica*

犬芥子 別名: ヘビクサ, ツミナ, アゼダイコン, アゼガラシ, ノガラシ

#### 主な生育場所

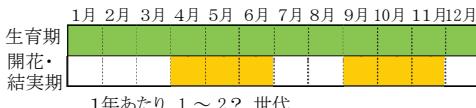
田畠の畦、畑、休耕田、路傍、河川敷、水路わき、ため池の縁など、湿った環境によく見られる。春耕前の水田にも生育するが、耕うんされやすい水田内よりも畦畔での生育が多い。

名前の由来: 全草、辛みを帯びて、芥子のようだが、食用としては芥子に劣るためイヌガラシ。有益な植物に良く似ているが、あまり役に立たないものに対しては、"イヌ"と名付けられることが多い。

#### <農業との関係>

畑地や果樹園で普通に見られる雑草で、主に秋に種子から発芽してロゼットで越冬し、暖かくなる同時に伸長して開花・結実するため、春作の雑草と扱われることが多い。しかし、秋以外に発芽する個体もあり、果樹園や畑地では通年の雑草となる。また、刈り取りにも強く、刈り残った株からも再生するなど、絶えることがない。花が咲くと目立つが、多発しない限り、それほど害となることは少ない。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



花は黄色の4弁花



開出する円柱形の果実

#### <類似種>

イヌガラシより小型で上部の葉まで切れ込みが目立ち、果実に柄がないコイヌガラシは主に氾濫原に見られる。イヌガラシと混生することも多いスカシタゴボウは葉の切れ込みが大きく、果実は長楕円形で長さ5-7mm、幅1.5-2.5mmと太く短い。

#### <一言うんちく>

イヌガラシは、有史以前にイネが大陸から導入された際に、随伴して日本に渡来してきた史前帰化植物とされています。外来種のモンシロチョウとともに里山でよく見る中型の白い蝶の代表種スジグロシロチョウは、このイヌガラシを食草とするため、やはり史前帰化種と考えられています。

#### <人との関わり合い>

全草にちょっと辛みがあり、この風味を活かして若菜やつぼみを和え物や汁の実に利用できる。また、冬から春にかけてきれいなロゼット葉か茎先の柔らかい葉を摘んで、よく洗ったあとサラダや天ぷらにしても美味しい。また、葉草となり、茎葉は心臓病によいとされ、種子を煎じて飲んで、咳止めや利尿薬として用いられる。また、種子は花粉症の症状を軽減させる効果もあるという。役に立たないものの代名詞である"イヌ"の名が付く植物であるが、意外と利用価値のある草花である。

#### <俳句や短歌への登場>

季語は一応、春とされているようですが、イヌガラシの名を直接詠み込んだ俳句・短歌等は確認されませんでした。イヌガラシを含め、アブラナ科の黄色い花をつける植物は、一様に「アブラナ」や「カラシナ」とされ、これまで区別されてこなかったこともあります。特にイヌガラシは通年、野辺に見られるため、季節感を重視する俳句等にはあまり取り上げにくい草花であったかも知れません。

分布: 沖縄を除く全国

### ワレモコウ (バラ科)

学名: *Sanguisorba officinalis*

吾亦紅、吾木香 別名: らゆ、じゅ、ダンゴバナ、ボウズバナ、テンピソウ、エビスグサ、ノヅチ

#### 主な生育場所

草原原生植物で、山地の草原や原野にも生育する。農村周辺では、裾刈り草地、林縁、ため池の堤体草地、畦畔の法面、農道の法面、水路や河川脇の草地など、草刈り頻度の低い草地によく見られる。

名前の由来: 「吾(われ)も亦(また)紅(こう)なり」との説もあるが、線香の原料として使われるインド原産の植物「木瓜」に根の香りが似ていて、吾(日本の)木瓜(もっこう)、との説が有力。

#### 特徴



#### <農業との関係>

草刈りや火入れなど、人間の適度の働きかけによって維持されてきた草地を「半自然草地」と呼び、ワレモコウはそのような草地の代表的な植物の一つ。しかし、草地の開発や担い手の不足などで、農村の周辺から半自然草地が少なくなってしまった今、ワレモコウを見かける機会がすっかり減ってしまっている。現在、新潟県や福井県、佐賀県など5県で絶滅危惧種に指定されている。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



ワレモコウの花(あなたは何色に見えますか)



ため池堤防草地のワレモコウ

#### <類似種>

里山の草地には、西日本でコバナノワレモコウ、東日本ではナガボノシロワレモコウが見られるが、花穂はいずれも白く、2-7cmと長く垂れ下がる。また、全国的に赤褐色の花のナガボノアカワレモコウも分布するが、花穂はワレモコウより長い。

#### <一言うんちく>

バラ科に属しますが、花びらではなく、昆虫などを誘引するために美しく目立つ花をつけ昆虫を媒介して受粉を行なう「虫媒花」から、風に頼った受粉を行なう「風媒花」へ向かう進化の途中段階とされています。進化上で最も、バラ科の他の仲間と離れて、独自の道を進んでいるように見えますね。

#### <人との関わり合い>

若葉は食べることができます。複葉を2つ折りにした春先の若い葉を炒めると、香ばしく歯ごたえも楽しめる。また、塩を入れた熱湯で茹でたのち、水に晒して、そのまま味わったり、バター炒め、みそドレッシングなどで味付けでも美味しい。乾燥した根は「地榆(ちゆ)」と呼ばれる生薬であり、中国の最も古い薬物書にも記載されている。止血や下痢止め、胃潰瘍などに薬効があるとされる。また、中国では婦人の乳腺炎などの乳痛の治療にも用いられる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】 我もまた 紅(くれない)なり ひそやかに (高浜虚子)  
その中の 恋の涙の われもかう われの涙の 野のわれもかう (与謝野晶子)  
鳴けや鳴け 尾花枯葉の きりぎりす われもかうこそ 秋は惜しけれ (待賢門院安藝)  
吾木香 すすきかるかや 秋くさの さびしきはみ 君におくるま (若山牧文)

分布：北海道を除く全国

### タコノアシ (ユキノシタ科)

学名：*Penthorum chinense*

蛸の足 別名：サワシオン

#### 主な生育場所

湿地や河原、沼沢地などのほか、元々湿地だったところに拓かれた水田の畦や畦際、水路沿い、休耕田などに生育する。他種との競合に弱いため、洪水や草刈りなど適当なかく乱がある場所を好む。

名前の由来：先端が外巻きで放射状に伸びた枝に吸盤のように小さな花がつく様子が、蛸の足を下から見たのに似ていることから。

#### 特徴

地下浅くに地下茎を持つ多年草。草丈は1m弱でやや株立ち状に直立し、互生する葉には細かい鋸歯がある。8~10月ごろに、茎の先端から放射状(たこ足状)に枝を伸ばし、上向きに黄緑色の小さい花を多数つける。茎や花序は赤みを帯びることが多く、秋には全草が紅葉する。晩秋には果実が黒く熟しよく目立つ。



#### <農業との関係>

かつては低地の水田地帯などに普通に見られたが、主に畦や畦際などに生育し水田に入り込むことは少なく、イネと競合する害草とはならず「ただの草」的な存在だった。しかし、乾田化が進み、畦にも除草剤が使われるようになり、激減した。また、休耕田や放棄田でも他の植物に負け、群落を維持できないことから、今では全国各地で少くなり絶滅危惧植物となっている。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



#### <類似種>

#### <一言うんちく>

タコも体形や体色を変えることが得意ですが、タコノアシも分類学的には扱いが変わりやすい植物で、かつては多肉植物のカランコエなどと同じベンケイソウ科の仲間とされていました。また、最新の分類体系では、ユキノシタ科ではなく、独立したタコノアシ科が新設されています。

#### <人との関わり合い>

かつては農村で珍しい植物でなく、特に花序を含め全草が紅葉した様子がまるで茹で蛸のように目立ったことから、さまざまに利用がなされてきたと思いや、わずかに中国で若菜を食用とするとのほか、意外と記録は少ない。ただ、その得意な草姿から、野趣味のある花材などとして庶民には使われてきたのではないだろうか。単なる「ただの草」とするには惜しいと思われる草の一つである。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語:秋?】※目立つ草であるが、これまで俳句や短歌などの題材になることはほとんどなかったようである。  
秋の田になにやら可笑し蛸の足 (陽溜)  
雁わたる空を見つめタコノアシ (むらくさ そよぎ)

分布：沖縄を除く全国

### アキノエノコログサ (イネ科)

学名：*Setaria faberi*

秋の狗尾草 别名：猫じやらし、ネコノオ、ケムシ、トアワ、ネコノシッポグサ、ノアワ

#### 主な生育場所

畠地、田畠の畦、休耕地、野原、路傍、空き地、土手など、やや乾いた場所に普遍に見られる。日当たりの良い場所を好み、樹下などの日陰でも生育する。湿った場所にはあまり見られない。

名前の由来：穂を狗(イヌ)の子のしっぽ(尾)に見立てて、イヌコログサが転化してエノコログサに。また秋に目立つのでアキノエノコログサ。別名の猫じやらしとは、穂に猫がじゃれつくことから。

#### 特徴

一年草。茎は細く、基部は地を這って枝分かれし、節からも根を下ろす。葉は線形で、長さ30~40cmに達し、幅2cmほど。葉の表面に短毛が密生する。葉舌は毛状。7月~11月ごろに桿の先にアワに似た円柱状の穂をつける。穂の長さは5~12cm、幅0.7~1cmで先は垂れる。芒は長さ6~15mmで種子の基部から5~8本出る。



#### <農業との関係>

エノコログサの仲間は、畠地や果樹園でヒシバと並んで夏~秋季の代表的なイネ科一年生雑草である。特にアキノエノコログサは他のエノコログサの仲間と比べて、大株となりやすく、大豆畑や不耕起畑で雑草害を引き起こすこともある。また、果樹園の草生管理下では、アキノエノコログサを中心とするイネ科一年生雑草が繁茂し、クローバーなどカバーロップの生育を抑制してしまうことがある。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



種子は約3mmで芒(のぎ)は芒は長さ6~15mm



エノコログサ

※穂はやや細く先が垂れない

#### <一言うんちく>

日本を含む東アジア原産のアキノエノコログサは、1960年代にアメリカ大陸に帰化し、大豆畑等に蔓延して強害雑草となっています。最近の研究では、輸入飼料を経由して、ますます強害雑草化したアキノエノコログサが日本等に再び帰ってきている可能性が指摘されています。

#### <人との関わり合い>

エノコログサの仲間は、アワの原種や近い種類なので、アワと同様に食べられる。また、殻付きのままフライパンで煎ると、微ながらポップコーンのようにして食べることができる。また、昔から芒が多く特徴的な穂は、子どもの身近な草花あそびの材料として利用される。例えば、毛虫に見立てたり、机の上などに置いて指1本で穂を押さえると前に進むことからレースをしたり、「猫じやらし」の名のとおり、猫の顔の前で穂を揺らすと猫が穂に飛びつくようにして遊ぶ。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語:秋?】※えのこ草、猫じやらし:エノコログサ一般  
よい秋や犬ころ草もころころ (小林 一茶) 犬の塚狗子草など生えぬべし (正岡 子規)  
秋の野に花やら実やらえの草 (金子 楚常) えのこ草道より下になりにけり (岩間 乙二)  
香にふれよ菊のあたりのゑの子ぐさ (加藤暁台) 七草にもれて尾をふる猫じやらし (富安 風生)

分布: 沖縄を除く全国

クズ (マメ科)

学名: *Pueraria lobata*

葛 別名: カタクリ, カイバ, クゾ, ウマフジ, ウマノボタモチ, クズッパ, カジネ

主な生育場所

山野, 林縁, 畦畔, 休耕地, 放棄地, 荒れ地, 河原, 堤防, 路傍など日当たりの良い乾いた土地に多い。果樹園にも侵入することがある。つる植物なので, 崖面に垂れたり, 木などにもよじ登る。

名前の由来: かつて大和国(吉野郡)国柄(くず)地域(現在の吉野町)が葛粉の産地であったことから, 国柄カヅラやクズと呼ばれるようになった。

特徴

多年生のツル植物。茎は茶色で、長く伸び、基部は木質化する。全体に褐色の粗い毛がある。葉は3小葉で互生し、先の葉は浅く2~3裂することが多い。7~9月ごろ、葉腋に2cmほどの赤紫色の蝶形花を多数総状につける。花後、褐色の長い毛で覆われた長さ6~8cm、幅約1cmのさや果をつける。さやには約10個の種子が入る。

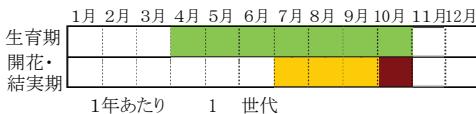


クズの花

<農業との関係>

畑や果樹園、草地を粗放管理にすると、たちまちのうちにクズに覆われてしまうことがある。地上部を刈り払っても地下の根茎からすぐ再生するために、ひとたび耕地に侵入すると根絶が難しく、休耕農地や放棄地の再生の妨げとなり、景観的にも荒れた印象を与えるため、近年は嫌われることが多い。また、育林地では幼樹に絡みつき、枝を折ったり樹形を悪くさせるので、害草として扱われる。

<生活史> 関東地方の例(目安)



地面を這うツル



よじ登ったクズで覆われた木

<類似種>

近年、河原や畑の周辺等でクズと競合するようになった外来種のアレチウリはクズと同じく旺盛なツル植物だが、葉は浅く切れ込むもののクズのように3小葉とならず単生する。また花は目立たない1cmほどの黄白色で、果実に刺がある。

<一言うんちく>

クズの繁殖力が注目され、外国では“KUZU”として绿化や土壤流失防止、飼料用として、導入されることがあります。アメリカでは各地に逃げ出し害草化してしまいました。国際自然保護連合によると、クズは世界の侵略的外来種のワースト100に指定される厄介な草としても知られています。

<人との関わり合い>

太くて長い根には大量のデンプンが含まれ、古来から「葛根(くずね)」から精製された葛粉は、葛餅や葛湯、料理のとろみ付けなどとして利用されてきた。また、根を乾燥させたものは、「葛根(かっこん)」と呼ばれ、生薬として、肩凝り、滋養強壮、鎮痛などに効果がある。さらに、ウマや牛などの家畜が好んで食べるため、飼料としても重宝してきたほか、ツルを利用して籠などが編まれたり、ツルを煮て取り出した繊維で編んだ葛布は衣服や壁紙にも利用されるなど生活に欠かせない有用植物だった。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】葛の葉の恨み頗る細雨哉 (蕪村) あなたなる夜雨の葛のあなたかが (芝 不器男)

足柄の箱根の山に延ふ葛の引かば寄り来み下なほなほに (万葉集十四)

あらし吹く真葛が原に鳴く鹿は恨みてのみや妻を恋ふらん (俊惠)

葛の花 踏みしだれて、色あたらし。この山道を行きし人あり (釈 達空)

分布: 全国

ナズナ

アブラナ科

学名: *Capsella bursa-pastoris*

齊

別名: ペンペン草, ガラガラ, 三味線草, ナデナ, オトコナズナ, スズクサ

特徴

主な生育場所

水田や畦、休耕田、畑、路傍、空き地、庭先など、日当たりの良い場所からやや日陰の場所まで至るところに生える。肥沃な土地を好み、瘦せ地でも耐えられる。完全に水没する場所にも生えない。

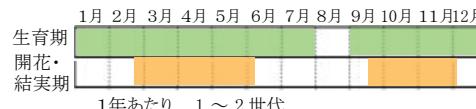
名前の由来: 夏に枯れて見えなくなることから夏無(なつな)との説がある。別名のペニペニ草は果実の形が三味線のバチに似ていることから。



<農業との関係>

土壤や環境を選ばず至るところに生えるため、代表的な畠の雑草である。一株あたり2,000~4,000個の種子をつけ、結実後は数ヶ月で発芽可能になり、種子寿命も比較的長いため、なかなか根絶させにくい。特に秋に発生したものは早春から旺盛に生育し、強害雑草化する。しかし、春以降に発生したものは大きくなることは少なく、夏には消えてしまう。

<生活史> 関東地方の例(目安)



ロゼット葉

『類似種』 マメグンバイナズナは主に路傍や荒れ地に生え、花時にロゼット葉が残らない。また花序に花を多数つけ、果実は円形。タネツケバナは湿った場所に生え、果実は細い円柱形。グンバイナズナの果実は大きく、先端が深くくぼみ軍配型。

<一言うんちく>

春の七草のうち、ナズナやハハコグサ(ごぎょう)、コハコベ(はこべら)、カブ(すずな)、ダイコン(すずしろ)は、いずれも古い時代にアジア大陸から日本に渡來した植物とされています。ナズナは麦もみに種子が付着したりして、麦の栽培をもたらした人々にくついてきたのです。



花と果実

<人との関わり合い>

春の七草の主役として、早春に若菜(ロゼット葉)を摘み、熱湯で茹でて細かく刻み七草かゆに入れる。成分としてビタミンA、ビタミンB1、ビタミンB2、カルシウム、鉄分などを豊富に含むため、野菜の少ない冬の貴重なビタミン源であった。また、消化機能を助けるとされる。生薬では、「薺菜(せいさい)」と呼ばれ、コリン、アセチルコリンブレンド酸を含み、主として各種の止血に使われ、利尿、解熱にも効くとされる。また、子どもの遊びとして、果実の柄を下に引いた茎を振り、果実の中の種子の音を楽しむ。

<俳句や短歌への登場>

【季語: 新年】(齊) なづな、春(齊の花、ペニペニ草)

沢蟹の鉄もうぐく薺かな (寥太) 一とせに一度つまるゝ菜づなかな (芭蕉)

もの思ひすくなき時はうちいで古野に生ふるなづなをぞ摘む (良寛)

よく見れば薺花咲く垣ねかな (芭蕉) 猫のみでペニペニ草を食みにけり (村上鬼城)

分布: 全国

### オランダミナグサ(ナデシコ科)

学名: *Cerastium glomeratum*  
ケラスティウム グロメラーツム

アラント耳菜草 別名: アオミナグサ

#### 主な生育場所

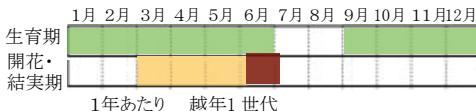
路傍、庭先、空き地、裏作水田や耕起前の水田、畑地、畦畔、果樹園、草地、休耕地など、人里の至るところで普通に見られる。日当たりが良好肥沃な土地を好み、やや湿った場所でも生育する。

名前の由来: 柔らかい毛が密生し、茎に向かい合ってついている葉を、ネズミの耳にたとえた。本種は在来種でなく、ヨーロッパ原産の外来植物なので、「オランダミナグサ」。

#### <農業との関係>

麦作や水田裏作の雑草であるが、幼植物で越冬し、草丈もそれほど大きくならないので、よく目立つ割には大量に発生しない限り、強害草となることは少ない。一方、キヤビツなどアブラナ科を栽培する畑では、ヨトウムシを忌避させ、幼植物がロゼット状に越冬するため、土壤の湿り気を保つとも言われている。種子は水田などの湛水環境下でも夏を越すので、農地周辺で普通の雑草となっている。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



左:オランダミナグサ、右:ミナグサ



オランダミナグサの幼植物

**<類似種>** 在来種のミナグサは、全体に毛が少なく、葉は濃緑色で茎はしばしば暗紫色を帯びる。花茎は長く花数もオランダミナグサより少ない。また、ハコベの仲間は葉に毛がなく、花弁が深く切れ込み10枚のように見えることが異なる。

#### <一言うんちく>

かつては在来のミナグサが各地の野辺に普通でしたが、今や山村の畑などに見られるのみで、都市部ばかりではなく農村部でもオランダミナグサしか見かけることができなくなりました。ミナグサがオランダミナグサに追いやられた要因は、まだ詳しく述べていません。

#### <人ととの関わり合い>

若葉は食用となるとされる。ミナグサも含め、薬効については不明である。

#### <俳句や短歌への登場>

東風吹いて君もオランダミナグサ (坪内稔典)

\*オランダミナグサはともかく、ミナグサは昔から普通にあったと考えられていますが、不思議と季語に取り上げられていません。類似種のハコベは季語になっていますので、ハコベ類と一緒にされていたのかも知れません。

分布: 全国

### ゲンノショウコ(フウロソウ科)

学名: *Geranium thunbergii*  
ゲラニウム ツンベルギイ

#### 現の証拠

別名: ミコシグサ、タチマチグサ、センニンタスケ、コウバウグサ、フウロソウ

#### 主な生育場所

野原、路傍、畦畔、法面、樹園地などの草地で普通にみられる。日当たりの良い場所を好むが、草丈の高い草などで披陰された半日陰でも生育する。やや乾いた場所に多いが、湿地周辺でも見られる。

名前の由来: 昔からよく効く胃腸薬として知られ、煎じて飲むと、たちまちのうちに効果が現れるということで「現の証拠」。別名のミコシグサとは、果皮が熟すと御輿の屋根のように巻き上げ上ることから。



#### <農業との関係>

水田畦畔や樹園地などでも見られ、耕起には弱いので、水田内や畑地内に生育することはほとんどない。草丈の低い草地を好み、比較的刈り取りにも強いので、畦畔草地の適切な管理指標種に利用できる。除草剤にも弱いよう、除草剤の散布歴のある水田畦畔には見ることができない。近年、手入れの悪い畦畔や除草剤管理の畦畔が増え、農耕地周辺では減少しつつある。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



東日本に多い白花タイプ(花弁に紅脈が目立つ)

#### <一言うんちく>

葉草として下痢止めの主成分はタンニンの一種ガラニンですが、ガラニンは下剤としても働き、相反する二面性を持つため、飲み過ぎても便秘になりにくいです。このようにゲンノショウコは副作用が少ないのも特徴で、昔からお茶として常用され、「医者いらす」とも呼ばれています。



西日本に多い赤花タイプ

#### <人ととの関わり合い>

下痢止めとしては、真夏の花が咲いている時期に、全草を採取し、水洗い後日光乾燥させたものを煎じて飲む。また、健胃、整腸、利尿、便秘、高血圧の予防に効果があり、副作用の少ない優れた薬草として、昔から利用されてきた。現在でも製薬用の材料として需要が高いが、栽培が難しいため、朝鮮半島から輸入されている。また、食用にもなり、葉と花を低温でゆっくり揚げて天ぷらにする。塩茹でし、水に晒し細かく刻んで佃煮にすることもできる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

夕明りげんのしょうこを次々に人たづさへて現るる坂 (与謝野 晶子)

げんのしょうこのおのれひそかな花と咲く(種田 山頭火)

着火点げんのしょうこの一輪に (増田 明美)

分布: 沖縄を除く全国

### バイカモ

### キンポウゲ科

学名: *Ranunculus nipponicus* var. *submersus*

梅花藻 別名: 梅鉢藻(うめばちも), 金魚藻(きんぎよも), ウダゼリ

#### 主な生育場所

河川上流部、湧水起源の水路、湧水池など、流れのある15℃前後の水温が安定している環境に生育する。北日本の積雪地帯では低地の水路にも見られる。底質は砂質を好み、水質汚濁には弱い。

名前の由来: 茎葉部は水中でなびきながら、梅の花によく似た5弁花を水面に付きだして咲かせることから梅花藻。別名の金魚藻とは、金魚鉢に入れると金魚とよく似合いそうなことから。

#### <農業との関係>

水田に生育することは滅多にないが、湧水起源で水温が安定している水路や積雪地方の水が涸れない土水路などによく見られる。過繁茂すると通水阻害を引き起こす可能性があるが、全国的に減少している植物であるので、徹底的な駆除ではなく、保全にも目を配りながら管理していくことが重要である。例えば、最上流部もしくは湧水域付近の大きな群落は積極的に残すような工夫が必要。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



湧水起源の水路に繁殖するバイカモ



砂質の水底に固着

＜類似種＞ 各地に近縁種が生育し、北海道には繊細なチトセバイカモ、北海道と中部地方には浮葉をつけるイチョウバイカモ、中国地方には葉柄が長いヒルゼンバイカモ、中国～九州地方には小型でため池にも生育するヒメバイカモなどがみられる。

#### <一言うんちく>

金魚藻とも呼ばれるバイカモは、金魚鉢でも育つ姿をイメージしがちですが、流水環境かつ15℃前後の水温を好み、底質も選ぶため、栽培は非常に困難な水草です。野外でも生育環境が限られるため、多くの都道府県で絶滅危惧種の指定を受けています。野外での採取は慎みましょう。

#### <人ととの関わり合い>

バイカモは生育地が限られ、河川上流部の清流を代表する花と知られるため、また特に観光シーズンの夏期に多くの白い花をつけることから、バイカモの自生地を観光スポットとしている地域も多い。江戸時代以前にも、「藻の花」として、多くの詩歌にも登場するなど親しまれてきた。また、有毒植物の多いキンポウゲ科のなかでは珍しく食べることができ、岡山県の山村では、バイカモ(正確には変種のヒルゼンバイカモ)をウダゼリと呼び、清流中に伸びた茎先を摘み、湯がいて食材として利用していた。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】※梅花藻など清冷な小川や湖沼の流れの中に咲く淡水藻の花を総じて、歳時記では藻の花と呼びます。

藻の花や小舟よせたる門の前 (与謝 翦村) 藻の花や夕べの舟は出した跡 (田上 菊舎)

玉ならず海王星を御冠にとらむとすなり藻の花がくれ (与謝野 晶子)

溪流の早瀬となれば梅花藻は水のなかにてなびきつつ咲く (大島 史洋)

分布: 沖縄を除く全国

### スイバ

### (タデ科)

学名: *Rumex acetosa*

#### 酸葉

別名: スカンボ, スイコンボウ, スイカのポンポン, スイコ, スッカシ, アカギシギシ

#### 主な生育場所

田畑の畦や道ばた、休耕田、果樹園、荒れ地、堤防の法面、河川敷などに普通にみられ、日当たりの良い場所に多い。また、酸性の土地を好むため、酸性土壤の指標植物となっている。

名前の由来: 茎や葉にシウウ酸カルシウムを含み、特に春先の若芽や葉などを口にすると酸っぱい味がすることから酸葉(すいば)。

#### 特徴

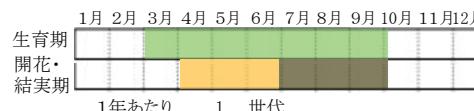
雌雄異株の多年生で、太くて短い地下茎がある。長い柄の根生葉は長楕円形で基部は矢じり状にとがる。茎は無毛で直立し赤みを帯びやすく、縦に筋があり中空。高さは30cm～1mほどになる。5～6月に茎先に円錐状の花穂をつけ、雄花は緑白色だが雌花は赤くなりよく目立つ。雌花は花後に3枚の翼に包まれた果実をつける。



#### <農業との関係>

スイバと同様に農地やその周辺に生えるギシギシ類と混同されがちだが、ギシギシほど畠地内に入り込まない。ただし、牧草地などで強害草種となることがある。富栄養条件を好み、畠地や荒れ地などではスイバがなくなると外来のヒメスイバやギシギシ類が繁茂する。また、ギシギシよりも擾乱に弱いと考えられ、基盤整備前の畦畔に多く、伝統的な畦畔を代表する植物である。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



基部が矢じり状に尖っている葉



真っ赤に色づく雌穂

#### <一言うんちく>

東北地方では、春先の出始める茎先を摘み、包んでいた袋を除くと現れるぬるぬるとした新芽を「オカ(陸) ジュンサイ」と称し、細かく切って油炒めにしたり、味噌和えや漬け物にして楽しめます。しかし、春先の若芽の多食は肝臓障害を引き起こすこともありますので避けましょう。

#### <人ととの関わり合い>

ヨーロッパでは古くから野菜として食用にされ、品種も数系統あった。また、ミョウバン媒染で毛織物の黄色染料となり、地下茎を乾燥させ淡紅色の染料として利用されていた。天日乾燥した花穂を細かく刻み、熱湯を注いでスイバ茶としても利用でき、健胃や整腸、さらに抗がん作用があるとされる。スイバの抗がん効果については、近年の薬理実験による研究でも明らかにされている。また、生の根をすりおろしたものは皮膚病に、根を天日乾燥し煎じて飲むと便秘に効果があるという。

#### <俳句や短歌への登場>

【酸模(すかんぽ): 春】

すかんぽの酸味を舌に感じぬる春来て故郷(くに)を思ひいづるとき (前田夕暮)

すかんぽの茎の味こそ忘られぬといけなき日のもののかなしみ (吉井勇)

すかんぽをかんまでまぶしき雲とあり (吉岡禪寺洞)

分布: 全国

コハコベ (ナデシコ科) 学名: *Stellaria media*

小繁縟 別名: ハコベラ、アサンラゲ、ホコベ、ピヨピヨグサ、ウサギグサ、ひよこ草 など

主な生育場所

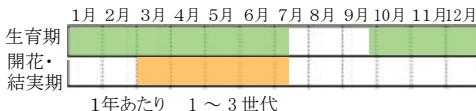
冬作の畑や耕起前の水田、果樹園、休耕田、路傍、庭先など、乾いた場所からやや湿った場所まで至るところに生える。よく陽がある肥沃な土地を好み、堆肥場にも多いが、瘦せた土地には少ない。

名前の由来: 万葉集に詠われる「波久培良(はくべら)」からハコベラ → ハコベに転化したとされる。「ハク」とは布きれ、「ベラ」は「群がる」で、小さな葉が地面に群がる様子を表したとされる。

<農業との関係>

ムギなどの水田裏作や畑地での春雑草だが、涼涼な北日本などでは春から秋まで開花・結実し、主要な春雑草となる。発芽温度は最低2~5°C、最適10~20°C、最高30°Cで、暖かい地方では夏には見られない。pH5.5~6.5の肥沃地で生育が旺盛となりリノ酸欠乏に弱いため、農地の肥沃度の指標となる。農地での発生が多いが、防除しやすいため大きな問題となることは少ない。

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> よく似るミドリハコベはやや日陰に生え、茎が緑色で大柄。また雄しべの数も多く(コハコベ:3~5本程度、ミドリハコベ4~10本程度)、種子表面に顕著な突起を敷く。近年の帰化種で市街部に多いイヌコハコベは花弁がなく萼基部に斑点。

<一言うんちく>

縄文時代後期や弥生時代に稻作や麦作の伝播に伴って日本列島に渡来してきた植物を史前帰化植物と呼び、コハコベも麦類の随伴雑草の一とされます。麦作とともにやってきた史前帰化植物には、他にナズナ、サナエタデ、カタバミ、ハハコグサ、ツユクサ、カモジグサなどがあります。



<人との関わり合い>

春の七草の一つ「はこべら」として、ミドリハコベとともに古来から山菜として利用されてきたが、生食すると青くさい。粥にいれるほか、ゴマ和えやバター炒め、天ぷらなどにすると美味しい。また鶏やインコなどに与えるとよく好み、「ひよこ草」としても知られる。また、民間薬としてハコベには炎症を緩和する作用があるとされ、湿疹や歯槽膿漏、歯痛などに利用してきた。特に、歯槽膿漏には食塩にハコベの葉の粉末を混ぜた「はこべ塩」で磨ぐといいとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語:春】 カナリヤの餌に束ねたるはこべかな (正岡子規) 筑紫野ははこべ花咲く睦月かな (杉田久女)  
畦草のはこべもぐくと繁りたり幼ごころ湧きて寝ころがりたき (崔田空穂)  
石垣に春日あかるくはこべらの微け花は数限りなし (土田耕平)  
我が顔を雨後の地面に近づけてほしいまゝにはこべを愛す (木下利玄)

分布: 本州以南

コモチマンネングサ (ベンケイソウ科) 学名: *Sedum bulbiferum*

子持ち万年草 別名: ボロボログサ、コボレグサ、ツメクサ、ホタルグサ、ベンケイソウ

主な生育場所

水田や畑の畦畔、休耕田、路傍、樹園地、庭先など、日当たりが良い場所もあるが水はけも良い場所を好む。石垣の畦に見られるなど、乾燥にも強いが、コンクリートの畦上では見かけることは少ない。

名前の由来: 開花期前後に葉の腋にたくさんのムカゴをつけ、それがこぼれて株元に多くの苗が見られ、絶えず繁殖を行っているように見えることから、「子持ち万年草」。



石垣畦畔の隙間などに多い

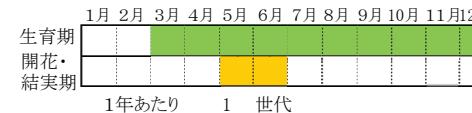
<農業との関係>

石垣の畦畔では隙間に生え、除草がしにくいことがある。土畦にも生えるが、草丈が低いこともあり邪魔にならない。ときに耕起前の水田に見られるが、灌漑には弱く姿を消してしまう。ムカゴがよくこぼれ、庭先に生えると厄介な草となる場合もあるが、農地やその周辺でよく見られるものの強雑化することは少ない。



開花期(葉腋に丸い葉を持つムカゴがみえる)

<生活史> 関東地方の例(目安)



<類似種> 近年、近縁の外来種が多く見られるようになり、メキシコマンネングサの葉は4~5枚の輪生で花付きもよい。ツルマンネングサは都市近郊に多く、葉は3枚の輪生で、葉先は尖る。他に「セダム」の名で多くの園芸種が逸出している。



葉は3輪生でむかごをつけない  
ツルマンネングサ

<一言うんちく>

万年草とあらのように、年中見られるように思われるがちですが、実際には開花後の6~7月には親植物は枯れてしまい、地面に落ちたムカゴがそのままほとんど成長せずに翌春まで過ごし、3月頃から活発に分枝を始めます。従って、夏から冬にかけてはなかなか見つけにくいのが実状です。

<人との関わり合い>

コモチマンネングサの仲間は多肉植物で乾燥に強いことから、最近、屋上緑化の資材として利用されることが多い。コモチマンネングサ自体は、その名に違い、盛夏期にはムカゴを残して枯れてしまうことから適さない。また、食材として利用された記録も見当たらないが、毒はなく、お浸しなどでクセがなく食べられるようである。

<俳句や短歌への登場>

【季語:秋】 雨つよし弁慶草も土に伏し (杉田久女)

分布: 沖縄を除く全国

### クサノオウ

(ケシ科)

ケリドニウム マユス  
学名: *Chelidonium majus*

草の黄 别名: にがくさ, タムシ草, 白屈菜

#### 主な生育場所

日当たりが良い草地や畦、林縁、路傍、石垣、土手などに見られる。比較的肥沃な場所を好むが、畑や樹園地にはあまり見られない。また、冠水地や乾きすぎのような場所にも生育しない。

名前の由来: 黄褐色の乳液を出すことから「草の黄(おう)」とする説や、皮膚病の瘡(くさ)によく効くことから「瘡の王」としたとする説がある。

#### 特徴

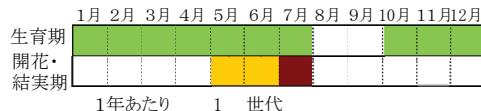
秋に芽生えて越冬する越年草。高さ30~80cmほどで、全体は柔らかく白色を帯び、茎は中空。茎を折ると黄褐色の乳液がしたたる。葉は互生し、羽状に切れ込む。葉裏と茎には白い縮れ毛がある。茎先に径2~3cmの黄色い4弁花をつけ、花が終わると細長い円柱形の果実をつける。脂肪塊が付着する種子はアリによって運ばれる。



#### <農業との関係>

畑や樹園地に生えることがあっても、手入れのあまり行き届かない隅地などにわずかに生える程度なので、害草とはなりにくい。ただし、毒草のため、家畜にとっては有害植物であり、自然状態では摂食を避けるが、牧草等に混ざったり、強制的に食べさせると中枢神経の麻痺や知覚麻痺を引き起こす。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



鮮やかな黄色い4弁花。まれに八重咲きもある。



茎には白い縮れ毛が生える

#### <類似種>

クサノオウは人里の植物だが、もう少し自然度の高い林縁などの半陰地には花の径が約4cmと一回り大きいヤマブキソウが見られる。ヤマブキソウの葉は3小葉でクサノオウのように深く切れ込まない。

#### <一言うんちく>

クサノオウの黄褐色の乳液には、ケシのアルカロイドに似た有毒物質が含まれ、作用は弱いものの鎮静作用や知覚麻痺作用があり、かつて尾崎紅葉が胃癌の痛み止めに使用していましたが、毒性が強いため、血圧低下、めまいなどの副作用がひどく、現在では使われることはありません。

#### <人ととの関わり合い>

全草に非常に強い毒を持つ植物だが、古来から西洋東洋かわらず、薬草としても利用され、湿疹等には乾燥させたクサノオウの煎じ汁を患部を洗うといわれる。また、いぼやタムシには、生の茎葉のしづり汁を何回かに分けて塗る。このように皮膚疾患には「王」と呼ばれるほどよく効くが、内服は非常に危険で死亡例もあるので、食することは絶対に避ける。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語:夏】

頂上の日当とろの草の王 (塩崎口恵)

分布: 沖縄を除く全国

### ヤブカンゾウ

(ユリ科)

ヘメオカリス フルファ  
学名: *Hemerocallis fulva*

/ クワンゾー  
var. *kwanso*

薦萱草 别名: ワスレグサ, オニカンゾウ

#### 主な生育場所

田畑の畦や草地、路傍、林縁、河原、堤防など、やや乾いた場所に生育する。花がきれいなため庭に植栽されることもある。葉は左右2列に並び根生し、長さは40~60cm。葉の幅は約4cmで全体は無毛。6~8月に花茎を1mほど伸ばし、茎先に橙色を帯び赤色の斑紋がある八重咲きの花を上向きに数個つける。



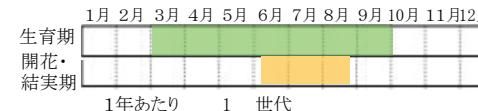
#### <農業との関係>

農耕地の周辺に多く、果樹園内で見かけることもあり、繁殖力も強いので害草と扱われるが、食草となること、花がきれいなことなどから、あまり問題とされていない。



ヤブカンゾウの若芽

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



一重咲きのノカンゾウの花

#### <類似種>

川辺やや人里から離れた野辺に見られるノカンゾウの花は紅色が強く、一重咲き(6弁花)で花期はやや遅い。また、ゼンティカ(ニッコウキスゲ)やエゾカンゾウなど他のキスゲの仲間は横向きに花をつける。

#### <一言うんちく>

かつて中国では、春先に萱草の若芽を食べると「憂いが晴れる」とされ、やがて萱草の花を見たりするだけで「憂いを忘れさせてくれる」力があるとされました。また、美しい花が一日で萎んでしまうことから「忘れ草」との説もあります。なお、漢字でいう「甘草」とは別の植物です。

#### <人ととの関わり合い>

ヤブカンゾウやノカンゾウの若芽は「山菜の女王」とも呼ばれるほど美味で、昔から食草として利用してきた。まだ土中にある若芽を熱湯でさっと茹でるとぬめりと甘みがあり、イカなどと辛子酢、ゴマ和え、酢味噌で美味しい。若い葉は茹でて水にさらし、卵とじ、煮付け、油炒めなどで食べる。花びらやつぼみも天ぷらやさつと湯をくぐらせ二杯酢で。つぼみを乾燥したものは、解熱や利尿にも用いられる。また、生の根を碎いて腫れ物に貼るといわれる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語:夏】 忘れ草 吾が紐につく時となく 思いわたれば 生けりともなし (作者未詳・万葉集)

恋ふれども 逢う抛るのなきは忘れ草 夢路にさえや 生いしげるらむ (詠み人知らず・古今和歌集)

わすれ草菜飯につまん年の暮 (松尾芭蕉)

湯治場や黄なる萱草得て帰る (正岡子規)

分布：北海道を除く全国

### カラムシ

( イラクサ科 )

学名: *Boehmeria nivea*

穀蒸し(草真麻) 別名: マオ, クサマオ, チョマ, あおぞ

#### 主な生育場所

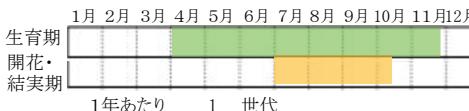
野原や山野、河川敷、土手、林縁、道ばた、田畠の畦畔、休耕地などに生育する。池の縁などのやや湿った場所も好み。群落となることが多い。

名前の由来：茎(カラ)を蒸して繊維をとつことから「カラムシ」とされるが、「シ」は繊維一般を指すとの説もある。別名「マオ」とは「オ」が繊維からとつた糸を表し、眞の糸であることから「マオ」。

#### <農業との関係>

地下茎が発達し、草刈にも強いので、畦畔に生えると崩壊防止に役立つ。しかし、休耕田などでは刈り取りを行わないと高さ2mにも達し、茎も木質化するため厄介者扱いされることがある。湛水や耕起には弱いので、水田や畑地内に入ることはほとんどない。昔から繊維をとるために利用され、植栽されていたとも考えられ、人里の周辺に多い植物である。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



**<類似種>** 葉の裏面に綿毛がないアオカラムシや茎や葉柄に開出毛が密生するナンバンカラムシやその改良種であり草高も葉も大きくなる繊維作物ラミーなども人里周辺でよく見かける。

#### <一言うんちく>

カラムシの仲間はアジア全般で繊維作物として栽培されており、日本のカラムシも栽培用として持ち込まれた史前帰化植物の可能性もある。カラムシからとれる繊維は強靭かつ水に強いため、衣服のほか魚網やロープなどにも使われる。持統天皇も詔によって栽培を奨励したとされる。

#### <人ととの関わり合い>

カラムシやナンバンカラムシ、ラミーを含めて、古くから繊維植物として利用され、弥生時代は日本人の貴重衣の主原料だった。繊維は刈り取り後、水に浸し外皮をとり、さらに表皮を引いて利用する。中世でも越後を中心にカラムシが栽培され、越後ちりめんの材料であった。現在では、福島県や沖縄県で上布の原料として栽培され、福島県昭和村では「からむし織」として特産品となっている。また、食用の記録はないが、冬に根を掘り採り、乾燥して煎じると利尿剤になり、生の根は腫れ物に効くとされる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

苧(からむし)のあとから蕎麦の二葉哉 (浪花) 草苧麻に朝の日とどく窓どころ (岡田 和子)  
むしぶすま柔やが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも (万葉集・藤原暦) ※むしぶすまとはカラムシの繊維でつくった夜具のこと



ナンバンカラムシ(カラムシより葉が大きく茎や葉柄に長い毛がある)

分布：全国

### セイヨウアブラナ

( アブラナ科 )

学名: *Brassica napus*

西洋油菜 別名: 菜の花、アブラナ

#### 主な生育場所

主に畑で栽培されるが、休耕畑や空き地、路傍、草地などにも逸出して生える。河川敷や堤防でも生育することがある。日当たりの良い肥沃でやや乾いた土地を好み、水はけの悪い場所には少ない。

名前の由来：江戸時代にナタネ油用に栽培していた在来のアブラナの近縁種であるが、明治時代初期にヨーロッパから導入された採油植物のため、西洋油菜と呼びならされた。



#### <農業との関係>

元々は北ヨーロッパで自然雜種として誕生し、油脂作物として収量が多いため、栽培されるようになった。現在では食用油の原料として、さまざまな品種に改良され、世界中で栽培されている。日本でも北海道を中心とした17,000ha以上で栽培されている。ただし、栽培畑から逸出し、雑草化していることが多い。特に河川敷や法面などで大量に繁殖し、在来の生態系を擾乱する事例も報告されている。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



4弁花を茎頂に密集させる



葉の基部は広くなり茎を抱く

#### <一言うんちく>

唱歌「おぼろ月夜」で「菜の花畑に入日薄れ」と歌われている菜の花とは、セイヨウアブラナや、在来の油脂植物アブラナではなく、実は作詞者である高野辰之の故郷（長野県）で栽培されていた種取り用の畑の野沢菜の黄色い花を描写したものとされています。

#### <人ととの関わり合い>

セイヨウアブラナは油脂植物だけでなく、養蜂家にとって貴重な蜜源植物となる。また、採油したナタネ油は、灯明や軟膏の材料となり、油を絞ったカス(菜種粕)は良い肥料となるなど、さまざまに役立つ植物である。食用素材としても優秀で、「三重なばな」は桑名地方の特産となっている。また、チェルノブイリ周辺では放射性物質の除去植物としても利用されている。一面に広がる菜の花畑は春の訪れを告げる風物詩として、各地で景観植物としても利用されている。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 春】

しろたへのわが鶴(かけ)にやる春の日の餌(ゑ)には交れり菜の花の黄も (岡本かの子)  
菜の花や月は東に日は西に (与謝蕪村)  
菜の花の中を浅間のけぶり哉 (小林一茶)

分布: 全国

### タネツケバナ (アブラナ科)

カルダミネ スクーターラ  
学名: *Cardamine scutata*

種濱け花 別名: こめなずな, めぐらぜり, たがらし, みずがらし

#### 主な生育場所

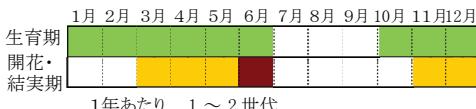
水田, あぜ, 裏作のムギ畑, やや湿った畑, 休耕田, 水路脇などの水辺, じめじめしている路傍など, 湿気のある場所を好み。一時的に冠水しても生育は可能。陽地から半日陰まで生育は見られる。

名前の由来: 水稲作の準備として, 苗代に種穂(たねもみ)を播く前に水に浸ること(浸種)が必要。この浸種の頃に本種の花が咲くので「種濱け花(たねつけばな)」と呼ばれる。

#### <農業との関係>

水田裏作のムギ畑などでは害草となる。田畠どちらにも生育するが、水田では春耕・代かきによって鋤込まれるため問題とはならず、畑地雑草としての側面が強いが、害草程度は低い。一方、早春の水田に白い花をつける群落は目立ち、昔から名の由来のように農事暦の目安とされ、水田には馴染みのある草花のひとつである。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



早春の水田に一面に咲いたタネツケバナの花



タネツケバナの芽生え

#### <一言うんちく>

愛媛県松山地方では、タネツケバナの類似種で清流などに生育する多年生のオオバタネツケバナを“ティレギ”と呼び、辛味が強く香りも良いので利身のまなどに昔から利用されてきました。特に市内高井町のわき水に生育するティレギは良質で松山市の天然記念物に指定されています。

#### <人ととの関わり合い>

その名のとおり、水田に生え早春からよく目立つので、農事暦だけでなく、いろいろと利用されてきた。辛味があるので、独特の風味を活かして、手早くさっと茹でお浸しや和え物にして食べられる。近い仲間のクレソンのように、肉料理と付け合わせてもよい。また、からりと揚げて天ぷらも楽しめる。乾燥させた種子を煎じて飲むと、むくみ、腫れ物の利尿や咳止めなどに効くとされ、またできものには新鮮な葉をすり潰して幹部に塗布する。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 春】

雨風のあとや種付花の群 (篠崎 圭介) 田一枚種濱け花満てる (滝沢 伊代次)  
秋風や高井のていれぎ三津の鯉 (正岡子規) ※ていれぎ: オオバタネツケバナ  
ていれぎや高井の里の秋の水 (高浜 虚子) ていれぎや弘法清水湧きやす (吉野 義子)

分布: 沖縄を除く全国

### ミゾソバ (タデ科)

ペルシカリア ツンベルギ  
学名: *Persicaria thunbergii*

#### 溝蓄麦

別名: ウシノヒタイ, カナモングサ, ウシブタイ, コメバナグサ, カワソバ, イデソバ

#### 主な生育場所

小川や用・排水路, 川辺, 湖沼・ため池, 水田の畦際など、水辺に普通にみられる。やや富栄養な水質の場所を好み。休耕田や道ばた、原野、山道などの水が染み出るような湿った場所にも見られる。

名前の由来: ソバの仲間で、溝のような場所に生えることから「溝蓄麦」。また別名は、特徴的な葉の形を正面からみた牛の顔の形に見立てて、「牛の額(うしのひたい)」。

#### <農業との関係>

畦や水路から水田内にも侵入して生えることもある。地面を這い群落を形成するので、畦際に繁茂すると水稻と競合する。

また、水が染み出る場所によく生えるので、本種が生えているとため池堤防などの漏水の指標となる。土水路に生えると水面を覆ってしまい、水路の位置がわからなくなってしまうので、水路沿いのミゾソバ群落は定期的な刈り取りが必要。

#### <生活史> 関東地方の例(目安)



花のようにみえる5裂した萼片

『類似種』 同様に水辺に生えるヤノネグサは葉に黒紋がなく、矢じり形となる。また葉鞘が1cm以上(ミゾソバの葉鞘は0.5~0.8cm)と長い。また、タニソバは山地の湿った場所に生え、葉は菱形で黒紋が出ず、茎にとげがない。

#### <一言うんちく>

「ソバ」が付く野草は、果実をソバのように利用できるものが多いようです。ミゾソバの実も粉にして湯で溶くとソバガキにして食べられます。供水などで農地が冠水し作物がどれなくなっていても、ミゾソバは地中にも閉鎖花を付けるので、殺荒作物としてうってつけだったのです。



湿地に見られるミゾソバ群落

#### <人ととの関わり合い>

秋には紅葉が美しいので、また淡紅色の楚々とした花もそれなりに風情があるため、夏から秋にかけての水辺の草花として親しまれてきた。実だけでなく、若い葉を茹んで、ゴマ和えや味噌和え、浸して食べられる。若い花穂を摘み、酢を落とした熱湯で茹でて食べる。また、花の時期の葉を摘んで干し、煎じて飲めば、ぜんそくやリュウマチに聞くとされる。さらに、生の葉を揉んで切り傷につけると止血剤になる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語: 春】  
溝蓄麦は水の際より咲きそめし (高浜 年尾) 溝蓄麦や候田乏しき水をひき (平松草太)  
みぞそばのかくす一枚の橋わたる (山口青邨) みぞそばの折り重なるも水室あと (日野たんぽぽ)  
溝蓄麦に秋日さしつづ孤(ひとり)なり土橋をわたるあたたかければ (前川佐美雄)

分布: 全国

### カタバミ

( カタバミ 科)

オキサリス コルニクラタ  
学名: *Oxalis corniculata*

### 酢漿草

別名: ミツバ、カネコグサ、トンボグサ、雀の袴、雀の提灯、ツツングサ、ガンゾウ

#### 主な生育場所

畑地、庭先、路傍、水田畦畔、荒れ地、草地、河川敷など、人里環境の至るところに生える。日当たりの良いやや乾いた場所を好むが、より乾燥している土地から水辺、日陰など、水中以外は生育可能。

名前の由来: 先が腫んだ小葉の形から葉が囁かれてるように見えることから、「片食(かたばみ)」。また「酢漿」とはホオズキのことで、果実を噛むとホオズキのように酸っぱいことから「酢漿草」。

#### 特徴

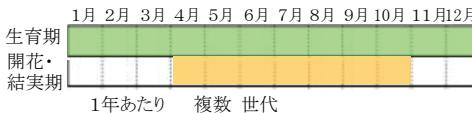
多年草であるが、種子繁殖も盛んに行う。高さ10~30cmで、数本の茎を根元から伸ばし、根を下ろしながら抜がる。葉は互生し、長い柄のある3複葉。春から秋にかけて葉腋から花柄を直立し黄色の5弁花を次々に咲かす。果実は長楕円形で直立し、熟すと多数の種子をはじき飛ばす。葉も茎も赤褐色となる品種をアカカタバミと呼ぶ。



#### <農業との関係>

繁殖力が強く、畑地、樹園地、芝生の強害雑草となる。積雪のない地方では、ほぼ一年中見られ、草高は低いものの栄養繁殖と種子繁殖も旺盛に行なうため、根絶することは困難である。しかし、外来種のムラサキカタバミなどと比較して作物との競合度は低い。また、カタバミは関東以西の農村で最も普通に見られ親しまれている蝶のヤマトシジミの幼虫の食草であり、許容度は高いと思われる。

#### <生活史> 関西 地方の例(目安)



カタバミの花



全体に毛が多いオッタチカタバミ

#### <類似種>

北米原産の外來種オッタチカタバミは、カタバミに良く似るが、茎は地上を這わずに立ち上がり高さ10~50cmに達する。カタバミと比べ、全体に白い毛が多く、托葉はごく小さい。また花後に花柄が斜めに下がる点もカタバミと異なる。

#### <一言うんちく>

カタバミの繁殖力の秘密は、①地下に球根を持ち、根を深く下ろすため定着するとなかなか枯れない。②茎は地上部を這いながら子株を多數つくる。③よく花も咲かせ、また花後はロケット形の果実を上向きにつけ、熟すと彈けて四方八方に1m以上種子を飛ばす、ことなどが挙げられます。

#### <人ととの関わり合い>

平安時代から家紋として利用される「五大紋」のひとつ。長宗我部氏や徳川家譜代の酒井氏、大分の広瀬氏などが用いた。全草シユウ酸を含むため、食べ過ぎると良くないが、酸味があるため油炒めに良い。また、野菜とともに花と葉を混ぜて一夜漬けにする。酸味が強いため、葉をみじん切りにして麺類の薑味にも使える。さつ湯でぐぐらせ、しょうゆと砂糖をからめてもよい。漢方では「酢漿草(サクショウソウ)」として、シユウ酸に殺菌作用があるため、生汁を虫さされや寄生性の皮膚病などに用いる。

#### <俳句や短歌への登場>

【季語:夏】 かたばみに同じ色なる蝶々かな (村上鬼城) 記憶ほどけるかたばみの花が揺れ (片山 純子)  
かたばみのそばに生ひたるかがみ草露さへ月に影みがきつつ(藤原為家)  
青ぞらにそびえてたてる松の木の下にちいさしかたばみのはな (大塚 楠緒子)  
青みこし芝草まじり咲きいでぬ黄いろ乏しきかたばみの花 (土田 耕平)

分布: 全国

### ミズハコベ

( アワゴケ 科)

カリトリケ パルスツリス  
学名: *Callitrichia palustris*

### 水繁縷

別名: ハコベ、ウキグサ

#### 主な生育場所

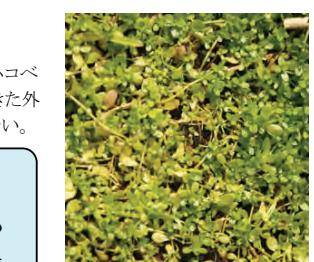
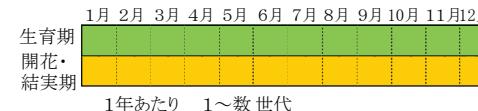
湧水由来の用水路や湧水が流れ込む河川、湧水池、また湿地や湿地、浅いため池や池干し後の底水、水の溜まりやすい休耕田など、通年で湛水状態にあるか地下水位の高い水辺に生育する。

名前の由来: 水中を漂う幅の広い葉が畑等に生えるハコベの葉に似ていることから、水はこべ。また水中を漂っていることからうきぐさ。

#### <農業との関係>

平均気温が10°C、水温が13°C前後で発芽してくるため、春先の苗代田にも発生し、群落を形成すると雑草害を引き起す。湿田には水田内にも生えるが、乾田にはほとんど見られない。水路内で大きな群落となることがあり、千切れたり流れたりした茎葉が取水障害を起こすこともある。小型雑草であるが、水中でよく伸長するので大きな群落となりやすく、ときに農業上の強害草となる。

#### <生活史> 関東 地方の例(目安)



#### <類似種>

水田にはミズハコベとよく似たミゾハコベが生えるが、果実はミズハコベと比べ球形に近く、葉先は四状に窪まない。また近年、関東地方を中心に増えてきた外來種のイケノミズハコベはやや大型で、水中葉はミズハコベのように線形とならない。

#### <一言うんちく>

春の七草の一つであるハコベ(コハコベ)は第37号で紹介したように、古来から山菜として利用されてきましたが、ミズハコベに関しては食用の記録が見当たりません。毒もなく清流に漂う姿からは美味しいにもみえるのですが、利用してこなかった理由が何があるのかも知れません。

#### <人ととの関わり合い>

食用や薬用の記録はなく、また詩歌などにも取り上げられたことはないようだが、近年、アクアリウム(観賞用に飼育魚や水草などを飼育・栽培すること)の愛好者の増加により、前景用の水草などとして流通されている。しかし、観賞用には在来のミズハコベよりも、南米産の別種のミズハコベが好まれるようで、イケノミズハコベと同様にその逸出や野外での繁茂が危惧される。

#### <俳句や短歌への登場>

古来より水路等でそれなりに目立つ植物だったと思われるが、残念ながら俳句や短歌で詠まれた例はないようだ。

分布: 沖縄を除く全国

## カズノコグサ

(イネ科)

学名: *Beckmannia syzigachne*

数の子草 別名: ミノゴメ, カエツリグサ, カエル釣りグサ

### 主な生育場所

収穫後から翌春の耕起前までの水田や休耕田、耕作放棄田、畦畔や湿地に生える。やや湿った土地を好みが、冬期でも湛水が続くような湿田には少ない。またムギなど裏作の水田にも多く生える。

名前の由来: 花序枝に扁平で丸い小穂が密着する様子を数の子に見立てて、植物学者の牧野富太郎が名付けた。

### 特徴

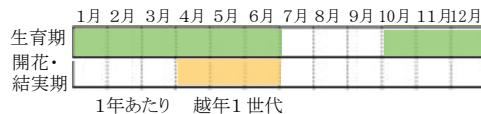
越年草あるいは早春から芽生える一年草。茎は直立し、根元からよく分枝する。茎はやや軟弱で太く、無毛。高さ30-70cmほど。葉の幅は5-15mmほどで葉舌は5mm程度で先は尖らない。4~6月に緑色で長さ10-20cmにもなる円錐状の花序をつけ、小穂を密に2列に並べる。小穂はほぼ円形で左右に扁平で熟すと黄色となり脱落する。



### <農業との関係>

暖地では水田裏作のムギほ場で、同じイネ科のスズメノテッポウなどとともに代表的な強害雑草となっている。土壤水分が高い水田で発生が多く、乾田化が進んでいる水田で発生は少ない。3月以降、気温が上がると生育が旺盛となり、繁茂するとコムギで50%以上の減収をもたらすこともある。除草剤による防除だけでは不十分な場合があり、乾田化などの対策を併せて行うことが重要である。

### <生活史> 関東地方の例(目安)



**<類似種>** 出穗してしまうと、独特な形状の小穂をつけるため、他と間違えることは少ない。出穗前は他のイネ科植物と紛らわしいが、スズメノテッポウなどと比較し、全体が明るく、茎も太くなりがちなので区別できる。また、長く尖らない葉舌も特徴である。

### <一言うんちく>

カズノコグサは、もともとは蓑米（みのごめ）と呼ばれていました。蓑米とは食べられるイネ科のことを指しますが、本種は食用となりません。カズノコグサと同じように湿った水田で見られ、穂を食べられるムツオレグサと誤同定されて間違って名付けられたと考えられています。



先が尖らずに鈍頭となる葉舌

### <人との関わり合い>

別名にもあるように、カズノコグサの穂を使って、子どもが水田でカエルを釣つて遊ぶことができる。カズノコグサの小穂は丸く大きいため、カエルが飛びつきやすいとされる。食用には適さないが、潮風にも強いので、海岸地帯では牧草としての利用が期待される。また、薬としての利用や薬効の記載は見当たらない。あまり役に立つ場面が少ないので、数の子に似た花穂はなかなか愛嬌があり、のどかな春の田んぼによく似合う草ではある。日本の農村の風景には欠かせない植物であるといえよう。

### <俳句や短歌への登場>

【季語: 春】

蓑米の花細やかや母のぐに（宮内佐代美）

※名前は馴染みがあるが、目立たない草であるため、俳句や短歌等で詠まれることは少ない。カズノコグサという字数の多さも敬遠される一因かもしれない。

分布: 全国

## シロザ

(アカザ科)

学名: *Chenopodium album*

白藜 別名: シロアカザ, ハンボコ

### 主な生育場所

休耕地や畑、畦畔など、農耕地周辺でよく見られる。よく肥えた比較的乾いた場所を好み、湿っぽい畦などには少ない。また、陽の当たる場所で大きく成長するが、畑などで作物の陰でも結実する。

名前の由来: よく似たアカザが、若い株の中心部（座）が赤くなることから「赤座」と呼ばれたのに対し、株の中心が白くなることから「白座」。



### 特徴

一年生植物。直立する茎は無毛で縦条があり木質化してよく分枝し、高さ0.6~1.5mほどに達する。葉は互生し粗い鋸歯があり、下部は三角形、上部のものは披針形となる。若葉には両面に白色の粉状の毛が生え、白く粉を吹いたように見える。8~10月に茎先に円錐状に花序をつけ、花弁のない黄緑色の小さな花を多数つける。

### <農業との関係>

農耕の伝来とともに帰化したと考えられている植物(史前帰化植物)であり、窒素が多い土壤を好みことから、発生密度が高いと畑の強害雑草となる。窒素の吸収力はエン麦の3倍以上とされる。一株あたり数万から50万粒の種子を生産し、土壤中の種子の寿命は数十年と非常に長いので、根絶は難しい。ただし、かつては野菜として栽培されていたことがある。



### <生活史> 関東地方の例(目安)



若葉は白い粉をふく

**<類似種>** 変種のアカザは、若葉の両面に紅紫色の粉状の毛が生える。また、シロザを小ぶりにしたようなコアカザは、あまり分枝せず下部の葉はシロザより幅が狭く、三角形とならずに下半分が浅く3裂する。



葉が浅く3裂するコアカザ

### <一言うんちく>

シロザの若葉が白く粉を吹くのは、遺伝子を傷つける紫外線から若い葉の細胞を守るために細かい白い毛を數き、組織の損傷を防いでいるからです。またこの白い毛は、葉緑素から活性酸素を発生させることによって、生産されています。

### <人との関わり合い>

かつては野菜として栽培され、葉は茹でたり胡麻和え、新芽は天ぷらなどにして食べることができ、同じアカザ科のホウレンソウによく似た味がするが、シウ酸を多く含むため多食は避けた方がよい。また、種子も食用にできる。なお、「藜の羹(あつもの)」の喻えは、粗末な食事のこと。

乾燥させた茎葉を煎じたものは歯痛に効果があるとされ、また生葉の搾り汁は虫さされに効くとされる。茎は直立し、太く硬くな

### <俳句や短歌への登場>

【季語: 夏】

そこらくに藜をつみて茹でしかば咽喉こそばゆく春はいにけり（長塚 節）

鍊上げば藜悲しきむけしきかな（高浜虚子）

我寺の藜は杖になりにけり（惟然） やどりせむあかざの杖になる日まで（松尾芭蕉）

分布: 全国

## ススキ

(イネ科)

学名: *Miscanthus sinensis*

薄

別名: カヤ, オバナ, テキリガヤ, カヤンボ, 尾花

### 主な生育場所

野原, 堤防面, 畦畔, 耕作放棄地, 山地の草原など, 乾いた日当たりの良い場所を好み大群落となる。草地の代表的な植物。酸性土壤にも強く, 火山帯にもよく見られる。観賞用に庭に植えることも。

名前の由来「ススキ」はすぐくと生えることで、「キ」は草を指すという。また、「ススキ」は「ササ」と同様に細い葉を示し, 葉縁が鋭くよく切れることから「切つ先」の「キ」をとて, ススキとしたとも。

### <農業との関係>

耕耘に弱いため, 通常, 畑に生えることはないが, 不耕起畑や果樹園などではときに雑草となる。その場合, 刈り取りに非常に強く大株となり, また地下に根茎を伸ばすので, 駆除は困難である。一方, 水田や畑の草抑えや土壤改良などを目的として刈り敷きの材料によく利用されてきた。また, 牛馬が飼として好み, 火入れにも強いことから放牧地や採草地では積極的にススキ草地を維持してきた。

### <生活史> 関東地方の例(目安)



出穂したばかりのススキの紫褐色の花穂



葉に白い班が入った観賞種:  
タカノハ(鷹の羽)ススキ

### <一言うんちく>

仲秋の名月は、農耕儀礼の一つで、もともとは畑で秋に獲れる豊かな実りを祝う収穫祭でした。団子等を神に供えるとともに災いを祓うために、葉縁が鋭く、また茎が固いため切り口も尖るススキを供えたとされます。お月見のあとは、ススキを庭先や畑にさして魔除けとしたそうです。

### <人ととの関わり合い>

カヤツリグサ科のスゲ属やチガヤとともに、「カヤ」と呼ばれ、かつては茅葺き屋根に使われたり、家畜の餌に利用されたり、広く利用してきたため、ススキ草地の維持のために集落の近くには定期的に刈り取りや火入れを行う「茅場(かやば)」が設けられていた。観賞用に品種改良も行われてきた。また、薬用にもなり、晩秋に採取した根茎を乾燥させ、刻んで煎じると、解毒や利尿、高血圧に効くとされる。また、穂は干して毛を開かせ煎じて飲むと香ばしい。穂を束ねてミズクの姿に似させて遊ぶこともあります。

### <俳句や短歌への登場>

【季語: 秋】山は暮れて野は黄昏の芒かな (与謝蕪村) をりとりてはらりとおもきすすきかな (飯田蛇笏)  
萩の花尾花菖蒲の花女郎花また藤袴朝顔の花 (万葉集・山上憶良) ※尾花=ススキ  
婦負の野の薄おしなべ降る雪に屋戸借る今日し悲しく思ほゆ (万葉集・高市黒人)  
朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯れ野のすすき形見にぞ見る (西行)

分布: 全国

学名: *Bidens frondosa*

アメリカセンダングサ 別名: セイタカタウコギ

### 特徴

荒れ地や路傍, 畑, 樹園地, 草地, 水田, 畦畔, ため池の縁など, 身近な人里環境内のいたるところに見られる。乾いた環境から水辺まで生育可能であるが, やや湿った環境に見られることが多い。

名前の由来: 3~5枚の小葉からなる様子が樹木の栴檀(センダン)に似て, 大正時代にアメリカから渡来してきたことから。また別名は類似種で在来の水田雑草タウコギに似て背が高いことから。



### <農業との関係>

水田雑草としてよく知られ, 中干し以降に大きくなるため, 稲刈りごろによく目立つだけでなく, 茎が硬くなるため収穫作業に支障をきたすこともある。水田内など水辺によく生えるが, 溝水条件下では発芽できなかつたり幼植物が枯死するため水稻生育初期の深水管理が重要となる。最近増加傾向があるが, 休耕田で大繁茂がみられるため, 休耕田が増えたことも本種が増加した要因と考えられる。

### <生活史> 関東地方の例(目安)



左:コセンダングサ, 右:アメリカセンダングサの果実



アメリカセンダングサの幼植物

### <一言うんちく>

イノコヅチやオナモミと並んで、秋の野辺の代表的な「ひつきむし」であるセンダングサですが、アメリカセンダングサも含めてこの仲間のほとんどはこの100年あまりの間に日本に渡ってきた新参者です。しかし、その果実の移動能力によって急速に全国各地に生息域を拡げていったのです。

### <人ととの関わり合い>

長い芒によって、衣服やベット等の体によく果実がくつき、また芒が刺さると痒くなるため、衣服等の果実取りに時間を費やす記憶をお持ちの方も多く、厄介な草であるが、茎が固くなる前の若葉は茹でて食用としてもできる。また、沖縄の宮古島ではアメリカセンダングサの仲間でやはり外来種として雑草化しているタチアワユキセンダングサをお茶や化粧品などの材料として利用している。

### <俳句や短歌への登場>

「ひつきむし」として晩秋の野辺を代表する植物と思われるが、残念ながら在来のセンダングサも含めて季語への登録はないようである。また草種名が長いためか、俳句や短歌に詠われた例を知らない。これだけ全国にありふれた草となっているだけに、新たに語呂のよい別名を設ければ、もっと詩歌に登場する機会が増えるのではないかと思う。